授業科目名： 体つくり運動	教員の免許状取得のための の必修科目	単位数： 1単位	担当教員名： 髙木 由起子、林 直樹、 村田 憲亮、渡辺 英次 担当形態：オムニバス
実務内容 （実務家教員の場合）			

科　目	教科及び教科の指導法に関する科目 （中学校及び高等学校保健体育）
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 体育実技

「学位授与の方針」との関係

現代社会の教育現場における体育・スポーツの課題と問題点を理解し、その克服と解決について生徒たちを導く力を身につける。「共生」の理念と体つくり運動の「気づき」「関わり合うこと」という概念の類似性・共通点を考えて、教育の中で求められていることについて整理していく。そのため、Aから Fの項目すべてに該当する。

授業の到達目標及びテーマ

（1）体つくり運動における「体ほぐしの運動」と「体の動きを高める運動」について、それぞれの意義と体育指導現場の現状を理解し、説明・指導を行うことができる。

（2）「体ほぐしの運動」において、「気づき」「関わり合うこと」を理解した上で運動創造と運動指導の実践ができる。

（3）「体の動きを高める運動」において、心身の成長・発達段階を考慮した上で運動創造と運動指導の実践ができる。

（4）「実生活に活かす運動」において、高校を卒業しても運動の継続できるよう運動指導の実践ができる。

（5）起こり得る危険を回避し、安全を管理していく方法を理解する。

（6）体つくり運動を通して、「主体的・対話的で深い学び」を習得する。

授業の概要

現代社会において子どもの体力低下は、運動に対して積極的に取り組む子や消極的な子の二極化が未だに顕著に見られ問題視されている。「体つくり運動」は、小学校低学年から高校 3年までのすべての学年において横断的に授業を実施さることが重要とされている。

「体つくり運動」は「体ほぐしの運動」と「体の動きを高める運動」で構成されており、「体ほぐしの運動」では、他の運動領域との関連性を念頭に適切かつ効果的な指導を行うことや、運動の苦手な生徒に対しての教育的配慮が必要であることが示された。また、「体の動きを高める運動」では、主として、「巧みな動き」「力強い動きを持続する能力」を高めるねらいは継承されている。さらには、「実生活に活かす運動」において、「体ほぐしの運動」と「体の動きを高める運動」で学修してきた体つくり運動の行い方や体力の構成要素を実生活へ取り入れることを理解し、自己や仲間の課題に応じた運動を継続するための取り組みが工夫できるようにすることがねらいとされている。

本授業においては、「気づき」「関わり合うこと」をキーワードとして「体つくり」について考え、生涯にわたり積極的に運動・スポーツを行う姿勢を養うことを目標とする。

授業計画
第１回：体つくり運動における新学習指導要領の位置づけ
第２回：体つくり運動の意義と学校体育の現場
第３回：アイスブレイクの理論と実践
第４回：新聞紙を使った運動の実践
第５回：ブラインド・ウォーク：「気づき」「関わり合うこと」の擬似体験
第６回：学校体育における「ゴールボール」の擬似体験
第７回：LGBTQ について考える
第８回：巧みな運動：ダブルダッチ(1)「気づき」「関わり合うこと」
第９回：巧みな運動：ダブルダッチ(2) グループ発表会
第１０回：力試しの運動の実践
第１１回：道具（ラケットなど）を用いた体つくり運動の実践
第１２回：ボールを用いた体つくり運動の実践
第１３回：力の釣り合いの運動：組立体操
第１４回：体の動きを持続する能力を高める運動
第１５回：体つくり運動の創造
定期試験（実技テスト）

スクーリングでの学修内容
　全１５回すべての内容を行う。上記した授業の到達目標及びテーマをよく理解した上で行動できる基礎を築く。運動を指導する上で、「気づき」「関わり合うこと」を常に意識する。

（１）楽しい運動の創造と実践
（２）危険回避、安全管理に関する知識獲得
（３）指導理論と具体的な指導方法

（主に楽しく運動する方法を学ぶ。）

教科書
岡出 美則・友添 秀則・岩田 靖『体育科教育学入門 三訂版』大修館書店　2021 年

参考文献
　下記参考文献から、プリントを作成して適宜配布する。
（１）体育科教育『特集　体つくり運動の未来図を描く』大修館書店　2017 年
（２）体育科教育『特集　令和を生きる子どもとこれからの体つくり運動』大修館書店　2020 年

学生に対する評価
スクーリング評価（２０％）、実技評価（８０％）の割合で総合して評価する。